

Voice 7

ぼいす

2001. 9. 15

北区飛鳥山博物館だより



HANAGASA



そよめ踊りいともあやめいといつれ
もたれた大刀のつらや 儼々
竹のさ 竹のさ 竹のさ 竹のさ
銀の板 してさるるを 名王
もえろのてまろし 名王
四人を物をももま法の三人
は太鼓を胸の経に横は付
うま才門をいといまのい
まかあつとも才門はとも
林とまえ 並立つ 相殿の

中城をいめるを道行のい
四人の向ひ立て彼方あり
は方には方る六彼方あり
ともま ちまふ是を行連と
いふ又四人の 皆踊りまて
やくに 踊りあて皆と
皆とあては是を皆物と
いふお辰のさし へん 向ひて 並
是を才門といふ 踊り 考て足
を板敷をやくあて 是を三拍子

そよめ踊りいともあやめいといつれ
もたれた大刀のつらや 儼々
竹のさ 竹のさ 竹のさ 竹のさ
銀の板 してさるるを 名王
もえろのてまろし 名王
四人を物をももま法の三人
は太鼓を胸の経に横は付
うま才門をいといまのい
まかあつとも才門はとも
林とまえ 並立つ 相殿の

OJIDENGAKU



親子で縄文土器作り

北区飛鳥山博物館では多種多様な来館者のニーズに応えるため、様々な事業を展開しています。中でも、今年度力を入れているのが子ども向けの各種事業です。開館以来、夏には「夏休み土器作り教室」や「博物館クイズラリー」など子どもを意識した事業を展開してきました。しかし、今年度はさらなるステップアップとして、夏休みを「夏休みわくわくミュージアム」と名づけたイベント期間として事業を展開しました。そこで、従来行っていた事業に加え、「季節の草木染め」や「昔の道具を作ってみよう」など新規事業を行いました。また、5のつく日は「GOGO博物館」として昔の遊びを行いました。期間中の事業の延べ日数は、21日になります。期間中の館の開館日が36日ですから、その約2/3、つまり2日に1回以上の割合で何らかの事業が行われたことになります。また、これらの事業とは別に閲覧コーナーでは「絵本の小部屋」が、特別展示室では「思い出空間 夏を集めよう！」が期間中の全日において開かれました。前者は自由に絵本を読める空間で、そこを使って事業も行われました。後者は昭和40年代の夏をテーマにした、親にして

みるとノスタルジックな、子どもにはシートを使った参加型の展示空間としました。

今年度のこの企画を通じて、子どもたち、あるいはその親は博物館に対してどのような印象をもったでしょう。今回の企画で初めて館を訪れた親子がかなりいました。そして、これをきっかけにまた参加したいとの声も幾つか聞こえてきました。仕事や家事の関係でなかなか博物館に足を運ぶ機会がない親も、一つのモノを親子が共同で作ったり、いっしょになってクイズを解いたりする、そんなことを通じて楽しい共有した時間を過ごしていただければと館では思っています。

また、子どもたちにも、博物館は楽しいところだと認識してもらうことがねらいです。ほとんどの子どもは学校の授業の中ではじめて博物館を訪れるのではないのでしょうか。そして、博物館は勉強する場所だというイメージを持つでしょう。確かに博物館はモノを調べたりする場所ではあります。そして、知識を得るよろこびを与えてあげるのも博物館の一使命でもあります。しかし、そればかりではありません。今回、「GOGO博物館」として昔の遊びを行いました。昔の遊びを知識として知ると共に、実際にやってみることがとても重要なことです。初めてその日に会った、年令も違う子どもたちでしたが、すぐにいっしょになって遊んでいました。しかも、年上の子は年下の子をかばったりしている風景も目にしました。子どもは昔も今も変わらないものです。ただ、みんなで体を使って外で遊ぶ場、あるいはそのようなシチュエーションが極端に減ってしまったというだけなのです。これから、学校は完全週休2日制になります。博物館は学校とは違った子どもたちのコミュニティーを作れる場と成り得ます。あるいは、そうするべきなのかもしれません。今年の夏は、何かこれから博物館ができること、するべきことを垣間見たような気がします。子どもたちがもっと博物館が楽しく、身近に感じてもらえるために、そして、子どもたちが次代の博物館の支援者となるためにも、今回のような企画はこれからも必要であると思います。



「私の水鉄砲もできたよ！」すっかりみんな仲よし

表紙の写真

『見田楽記』（でんがくをみるのき）別称『王子田楽記』

文化10年（1813）、本間游清著。王子田楽十二番の所作を詳しく見分けているほか、田楽終了時に行われる躍子が被る花笠の奪い合いのすさまじい情景が描かれています。 北区教育委員会所蔵

EVENT REPORT

イベントレポート

夏休みあせあせミュージアム？

今年は大変な猛暑。梅雨はどこへやら、7月から夏真っ盛りといった陽気でした。博物館も今年はひととき暑い夏を迎えました。その理由は「夏休みわくわくミュージアム」。ここでは特別展示室の「思い出空間 夏を集めよう！」を中心に、その準備から開催までの様子をご報告しましょう。



◆夏は冬から始まった？

夏休み事業担当の学芸員3人が話し合いを始めたのが今年の初め。3人とも「子どもたちにもっと博物館に親んでもらいたい」「親子で楽しんでもらいたい」という思いを共有していたので、方向性は意外とスムーズにまとまりました。親には懐かしい夏の思い出、子どもには娯楽性と解放感、そして知る喜びを感じてもらえるような事業を展開したいと考えたのです。

◆初夏の冷や汗

さて方向性は決まったものの、学校対応や展示準備などに忙殺されているうちに早くも5月。冷や汗を感じながら話し合いを進め、特別展示室を利用して、夏の思い出を詰め込んだようなイベント性の高い空間を作ろうということになりました。さらに内容を具体化するために、期待する観覧者つまり親子のモデル・タイプを仮想設定してみました。

親子は北区内のマンションに暮らしている4人家族。父親(42才)は関東近県出身でサラリーマン、母親(38才)は北区生まれの専業主婦。子どもは9才(小学校3年生)の女の子と6才の弟の2人兄弟、という設定です。この設定をもとに、親が自分の子どもと同じ小学3年生だった頃の夏をテーマにしようと考えました。つまり昭和40年代の夏です。



木、海岸の岩、丸太も全てダンボールを使った手作り



最終的には、母親が小学3年生だった昭和47年に時代をしばり、絵日記風パネルを軸に、大きな木、池、丸太、砂浜などの造作を配置。観覧者は各々のポイントからセミやザリガニなどのイラストを集めていき、そのイラストを使って男女別に用意したコラージュ・シートを完成させる、という趣向です。また当時のオモチャやソノシートなどの懐かしい資料も展示し、必要な箇所には解説パネルを付しました。

◆暑い夏の幕開け

やっと始動したものの、それからがまた冷や汗噴出でした。正直に言って、今年の夏の事業に予算はついていません。当然、作るものは原則的に手作業。最低限の材料、例えば紙やダンボール、絵の具などが買えるように事務担当者に頼み込みました。さらに造作が一苦勞。ダンボール箱を集めて、慣れない手で展示室内の造作を作り、絵日記風パネルの絵もダンボールを利用して作ってみました。強いて言えば、リサイクル・アート風でしょうか。

◆夏の思い出、つくってほしい…

さて、こうして幕を開けた「思い出空間 夏を集めよう！」ですが、見た限りでは設定に近い親子連れや子ども達に楽しんでもらえているようです。子ども達にはイラストを集める趣向が特に人気で、毎日コラージュ・シート作りに励む子どもの姿を見ることができます。アンケートでも「子どもの頃を思い出した」「親の方が懐かしくなった」「また来たい」など嬉しいコメントをいただいています。

今年の夏は他にも様々な事業を行いました。博物館での体験が今年の夏の思い出として、1人でも多くの子ども達の心に何かしら残ってくれたら、と願っています。(久保埜企美子)



ダンボールの池でザリガニ三つり！



コラージュに熱中する子どもたち



「移り変わる北区を見てみよう」

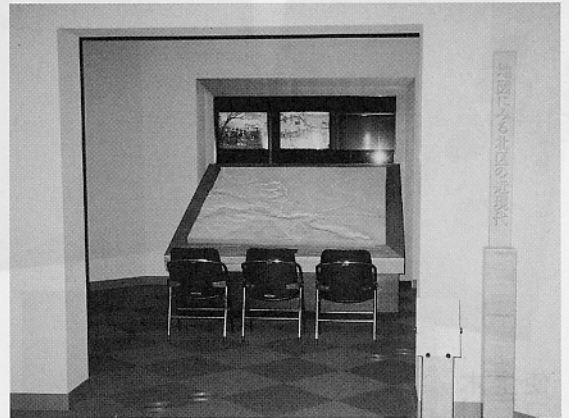
時代が明治に移り変わると日本では西洋の技術を取り入れた産業が次々と興ります。江戸時代に花見や紅葉狩りの名所として知られた北区の地も、こうした時代の流れと無縁ではありませんでした。「地図にみる北区の近現代」は、明治時代以降の北区の歴史を土地利用の移り変わりを中心に紹介していくコーナーです。

ここでは「河川が育んだ工業」「軍事施設の展開」「王子電気軌道と交通」「国有地解放と北区」の4つの解説ビデオ映像と展示資料で北区の移り変わりを紹介しています。

北区周辺は東京近郊で広い土地があり石神井川や千川上水などの水源に恵まれていたため、明治初期から多くの近代的な工場が設立されました。最初に設立された近代工場は、明治5年（1872）滝野川で操業を始めた鹿島紡績所です。外国製の機械を入れた日本最初の近代綿紡績工場の一つでした。この他、明治初期には、抄紙会社（現王子製紙）、印刷局抄紙工場などが設立され、以降も繊維、化学、機械など大小の工場がつけられました。また、当時は弾薬等の物資を作るために軍も大きな工場を必要としていました。北区にはこうした軍事施設も多くつくられ、赤羽台、十条台などの台地上を囲むように軍の工場が設置されていきました。

戦後、こうした広大な工場や軍用地は、団地や公共施設に変わり、現在は東京の近郊住宅地として発展しています。

こうした移り変わりをわかりやすく見せてくれる“すぐれモノ”が3面マルチモニターとスポット投影装置です。4つの解説ビデオをボタンで選ぶと、目の前にある3つのモニターに映像が流れます。モニターの前には区の地形を形取った大きな立体地形図があり、解説に合わせて工場の敷地や川、電車線路がスポットライトによって投影されていきます。皆さんもぜひ、近代北区の移り変わりを立体的に感じてみて下さい。（山口隆太郎）



3面マルチモニターと立体地形図

学芸員のエッセイ

ひねもす

8月の王子の夕べを彩る王子田楽。北区指定無形民俗文化財王子田楽は、岩手県毛越寺、和歌山県熊野那智山の田楽とならんで中世の姿を今に色濃く残す民俗芸能です。

さて表題、別に中世スコラ哲学のように「普遍の王子田楽」の実在性を否定して、真に存在するのは毎年「個々の王子田楽」だけである、といった唯名論的議論をするわけじゃないのデス。そもそも中世にはこの田楽が何と呼ばれていたのかという問題、裏を返すと「王子田楽」という言葉はいつ頃から出現したのかという



雅でファンタスティックな躍です

王子田楽はなかった！？

疑問がふと、湧いてきたのが問題の発端でした。早速に調べてみましたが確実に中世に王子の地に伝わったのに、中世の名称はよくわかりません。江戸時代初期、寛永18年（1641）の『若一王子縁起』には優雅な躍の様子は描かれていても、これを何と呼んだかは書かれていません。17世紀半ば成立の『江戸名所記』にしたところで「寺中の十二坊より躍子をいだして風流のをどりあり」とあるだけです。18世紀に入っても単に「王子祭」とか書かれるだけの状態が続きます。ようやく寛政7年（1795）の『豊島郡若一王子社田楽記』になると見聞記録も詳しくなり、一番一番の演目も注目されるようになりました。そして書名もずばり酔竹老人著『王子田楽記』が成立するのが寛政11年（1799）、今から約200年前のことです。この後、『王子権現田楽躍之図』とか『遊歴雑記』のように「王子田楽躍」という言葉が定着しました。このことは田楽が金輪寺十二坊だけでなく、王子地域の子供達によって演じられ出した時期、そして演じられる舞殿周辺に竹矢来が組まれた時代と重なる現象です。つまり王子田楽や花笠の争奪が江戸の風物詩となって多くの見物人が集中するようになり、毎年のように江戸の文人墨客によって田楽の見聞記録が作られたことの裏返しともいえることを意味します。この頃から王子田楽はひろく地域の人々の祝祭となっていくのでした。
ウィシクラウス・タカティヌス

収蔵品のご紹介

「ホーン・スピーカー付き真空管ラジオ」



ラジオ・キャビネット(左)とスピーカー(右)を接続した状態



キャビネット内部のようす

左の写真を見て、コレが何かすぐにわかりますか？蓄音機？もしかしてラップ型のは大きなマイク？いえいえ、違います。コレは私たちの生活に馴染み深いある電化製品なのですが…。実はコレ「ラジオ」なのです。

日本におけるラジオ放送は大正14年に始まりました。収蔵資料のこのラジオは、放送開始間もない昭和当初の国産品と思われます。まず一番に目を引くのはラップ型のホーン・スピーカーです。キャビネットの内部にスピーカーが組み込まれた今日の一体型が完成するのは昭和8年頃のことです。それ以前はスピーカーは外付けでした。ラジオ本体のキャビネットは家具調になっていて、インテリアとして今でも十分通用しそうなデザインです。では上ブタを開けて中を見てみましょう。3つ見える電球のようなものは真空管です。現在の電化製品のイメージからすると、何ともシンプルな構造に見えます。

ところで、大正末年頃の国産で真空管を3球使ったラジオの値段は150円～250円。もっと性能の劣る「鉱石ラジオ」でも10円～20円。この頃、国家公務員(大卒)初任給が75円、白米10kgが3円20銭、映画館入場料が30銭程だったことを考えると、ラジオはやはり高価なモノだったようです。また、ラジオを受信するためには聴取契約を結び、逓信局へ毎年1円、放送局へ毎月1円を納める必要がありました。それでも仮放送開始の大正14年3月22日まで契約加入者は5千件に達するほどの盛況で、その後は増加の一途をたどります。それが昭和33年度の1460万6千件をピークに減少に転じ、39年度には300万件を割り込みます。それとは反対にテレビの受信契約は30年代半ばから一気に増加。放送の主役の座はテレビにとって代わられました。とはいえ、今なおラジオが私たちの生活の中で大きな情報源であることに代わりはありません。

さて当館では12月中旬から3月はじめまで、年輩の方には懐かしい、子どもたちには新鮮な生活道具を展示する予定です。お楽しみに。(平野祐子)

あみせ

赤レンガが醸した近代

王子の音無川近くにレンガ造の建物があるのをご存じでしょうか？この建物は、明治37年(1904)滝野川の地に設立された醸造試験所の工場棟です。

醸造試験所は酒類などの醸造を科学的に研究する国の機関として設立されました。事業要領の中に「酒類及醸造物中特ニ清酒ノ品質及其ノ醸造方法ヲ改良シ酒造家ヲシテ其ノ実績ヲ挙ケシムルヲ以テ目的トス」とあるように、試験所では清酒の製造方法から麹菌の研究まで酒造り全般に関する研究と醸造に関わる講習が行われました。

場所の選定にあたっては、酒造にかかせない水の質や水量、建築のし易い土地かどうか等が考慮され、石神井川と千川上水の合流する現地に決定されました。この場所は、幕末に幕府が大砲製造のために反射炉を置いた所で、当時の錐台(大砲の砲身に穴をあけるドリルを受ける台)が今も建物の脇に残っています。敷地は約5000坪で事務所の他、研究所、工場、蒸留所、寄宿舎などの建物が配置されました。

つまきよりなか

設計には当時大蔵省の建築技師であった妻木頼黄が当たっています。妻木は横浜正金銀行本店(現・神奈川県立歴史博物館)を始め明治時代に多くの近代建築を設計したことで知られる建築家です。醸造試験所の設計にあたって、妻木が最も工夫を凝らしたのが現在残っている工場棟です。酒の発酵や醸造が良好に進むように日本酒の工場設備とドイツのビール工場の建築を斟酌した設計がされています。レンガ壁は常に一定の温度に保たれるように空気の間を挟み込んだ二重構造で、明かり取り

窓や空気抜きは二重扉になっています。この他にも空気の流通方法や冷却器など随所に工夫がされています。

その後、大正2年(1913)には醤油醸造の試験と講習も事業に加わるようになり、関連した施設が新設されました。施設は戦時中の空襲でほとんど焼失して、現在はこの建物だけが残っています。

試験所は平成7年に広島へ移転し、跡地は醸造試験所跡地公園として整備されています。

近代の息吹を今に伝えながら赤レンガの建物は静かに佇んでいます。(山口隆太郎)



旧醸造試験所工場棟(現・酒類総合研究所)
滝野川2-6-30

お知らせ

「あみせ」では皆さんの声をお待ちしています。「あみせ」への感想・ご意見などをお手紙かメールでお寄せください。また「夏休みわくわくミュージアム」に関する感想やご意見もお待ちしております。〒114-0002 北区王子1-1-3 北区飛鳥山博物館 Eメールアドレス Askamuse@kitanet.co.jp

閲覧コーナーから 「リンドグレンを知っていますか？」

アストリッド・リンドグレンと聞いてピンと来る方はかなりの文学通でしょう。「長靴下のピッピ」の原作者といえればお分かりでしょうか。(今も健在で何と93才!) 北欧を代表する児童文学作家であり世界的にも著名な、リンドグレン作品の多くが映画化されていますが、最近では「ロッタちゃんシリーズ」が一躍ブームとなったのは記憶に新しい所です。

リンドグレンの作品の特色の一つに美しい自然描写がありますが、十代までを過ごしたスウェーデンのスモーランド地方での生活体験が創作の原点となっているようです。「私の中にずっと存在している昔子どもだった当時のわたし以上にインスピレーションを受ける子どもはいません。」この言葉からも彼女の少女時代がいかに幸福で想像力に富んだものであったかが伺えます。もう一つの魅力は、リズム感のある文体と詩的な言葉遊びが盛り込まれ、作品全体にユーモアが引き出されている点です。80冊を超える作品の中には冒険物語、ファンタジー、探偵物語など様々なタイプのものがありますが、今回ご紹介するのは、短編集の「親指こぞうニルス・カールソン」(1949)です。昔から童話の中にも多く登場するモチーフ「親指こぞう」と男の子の交流を描いた表題作は、ファンタジーでありながら主人公の少年の孤独感や現実世界との対面が優しく描かれています。初期の作品ですが今の子どもたちが抱える問題にも重なる非常に現代的な作品です。

夏休み期間中、閲覧コーナーで開催した「絵本の小部屋」では、「こんな子ども部屋があったら」「通年で開催して欲しい」などの声が聞かれお客様にも好評でした。今後も更に閲覧コーナーを活用して頂ける様々な企画を考えて参りたいと思います。(岩崎みどり)



珠玉の短編作品集



「絵本の小部屋」での事業風景

ミュージアム・カレンダー 2001年10月～2002年3月

	10月	11月	12月
特別展示室	特別展 10/6(金)～	田楽展 王子田楽の世界 12/2(日)	(仮称)昔の道具展 12/15(土)
講座など	公園を知る 10/12(金)～11/9(日)全5回 熊野学シンポジウム 10/20(土) 古代の道 10/27(土)	田楽シンポジウム 11/3(祝) DMメンバー限定講演会 11/11(日)(予定) 遺跡探訪 11/17(土)、11/18(日) ミュージアムトークスペシャル! 11/24(土)	古代の道 12/1(土)、12/15(土)
特別展示室	2002年1月 (仮称)昔の道具展 ～3/3(日)	2月	3月
講座など		ミュージアムトークスペシャル! 2/23(土)	中級考古学講座 3/3(日)～3/31(日)全5回 地域学講座 3/27(火)

利用のご案内

【開館時間】

午前10時00分～午後5時

(有料の展示室への入場は午後4時30分まで)

【休館日】

毎週月曜日(国民の祝日・振替休日の場合は開館)

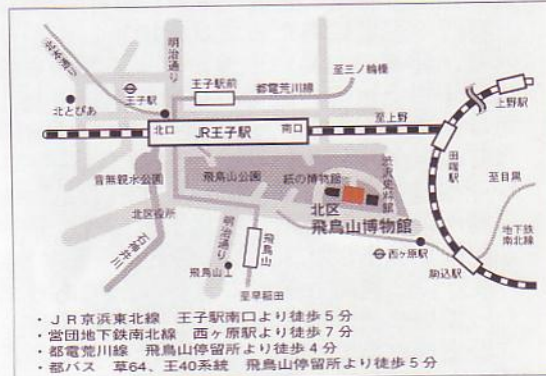
年末年始(12月28日～1月4日)

国民の祝日および振替休日の翌日(土曜・日曜日の場合は開館)このほかに臨時休館日等があります。

【常設展観覧料】

	個人	団体
一般	300円	240円
小・中・高	100円	80円

- ・小学生未満は無料
- ・団体扱いは20名以上
- ・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館の3館をごらんにいただけます。(一般720円小中高320円)



編集後記

7月20日から8月31日まで開催した「夏休みわくわくミュージアム」も無事終了しました。盛り沢山の事業の多くが初めての試みという前代未聞、怒濤の事例でした。予算のない中、知恵と体力と気力で乗り切った手作りの事業の数々。子ども達の笑顔に励まされ、また今後の博物館の課題にも気付かされた日々。猛暑とともに職員にとって今年忘れられない夏となりました。

「はいす」は前6号のカラーページから再び2色に戻りました。少しでも早く夏の事業のご報告が皆様にできればと思います、今号は自然に夏の特集となりました。秋からは特別展も始まり博物館に再び静けさが戻ってくることでしょう。学芸員も腰を落ち着けて調査研究にいそしみ、充電した来年の春を迎えることができれば幸いです。(岩崎みどり)

北区飛鳥山博物館だより はいす Vol.7

発行 平成13年9月15日
編集 北区飛鳥山博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
TEL.03-3916-1133
発行 東京都北区教育委員会
〒114-0022 東京都北区王子本町1-2-1
TEL.03-3908-1111(代)
印刷 (株)内国社印刷所